



## 畑家の人たち — 畑道也氏との往復書簡にみる

正田吉男 (社会昭39)

畑道也氏【冒頭】とは1960年関学大入学以来4年間、オーケストラ部員として学生時代を共にした。

彼は著名なチェリスト吉田貴寿の門下生であり、すでにしてプロ並みのチェロ弾きであったが、私はコントラバスの初心者にすぎなかった。同学年とはいえ、年齢は彼の方が少し上で、音楽のこと、実社会での体験等々、万事において十歳もの年長者にみえた。話術にもたけ、いろいろと面白い話を聞かせてくれた。その中で、いつまでも心に残るエピソードがあった。関学スポーツに、NOBLE STUBBORNNESSの標語を遺した、父・畑歎三氏【左】のことである(以下敬称略)。

「わしの親父は夏目漱石の教え子で、えらい尊敬しとってなあ、アメリカの大学に留学して、博士論文提出して帰ってきたら、漱石の博士号辞退事件や。親父は、先生がいらんいうたもんを、弟子のわしがもらうわけにはいかんいうて、また二ヶ月かけて船に乗って論文取り下げに行ったちゅうねん。ほんで、おふくろにアホやちゅうて叱られよってなあ」。

だから親父は博士号を持たないのだと、半ば誇らしげに半ば自嘲気味にいいかかったのであろう。話として面白すぎ、私としては多少疑わしい思いもあったのだが……。

ところが、ずいぶん後になって、そのことを確かめる機会を得た。

2005年7月、熊本の関学同窓会支部総会に院長畑道也としての出席があった。総会の後で私は上記のエピソードを持ち出し、「漱石とお父さんと君とでは、時代と年齢がちよっと合わないのではないか?」、と疑義を呈した。すると、「わしは、親父の六十の時の子やねん。帰ったら、なんか資料送るわ」、ということになったのである。

彼から来た資料と、その後やり取りをした手紙から、例のエピソードの検証を試みている。



**江戸時代の畑家** 四国丸亀藩支藩、多度津藩の家老職を長く勤めた家柄で、古文書に百姓一揆の首謀者を打ち首に処したなど、畑家に関する多くの記録が見られるらしい。その故、「おまえの先祖たちはいっぱい悪いことをしてきたのだから、あんたは良いことを仰山せなあかんのやで」、と一度ならず学院の日本史学・藤木喜一郎教授【右】から諭された、と私への手紙に書いている。



- 1871(M4) 廃藩置県により道也の祖父畑平学は藩家老職を失う。
- 1880(M13) 歎三、畑家の長男として丸亀に出生する。
- 1890(M23) 歎三の父(平学)は新制度下の郡長に推挙される。が、政敵に寝込みを襲われ、下駄で顎を蹴られて歯を折り、そこから黴菌が入って悶死する。臨終のとき、妻(道也の祖母)は「この仇はきつと討つ」と誓い、平学は「天、これを知る」といって息を引き取る。それ以来、彼女は男女五人の遺児を引き連れて仇探しに明け暮れる。そんな時、親戚の女性から一冊の聖書を手渡された。一つの言葉に教えられ、翻然仇討ちを放棄するや、伝道師を目指して神戸女子伝道学校(後の聖和大)に入学する。
- 1895(M28) 歎三 15歳、松山中学に入学。この年、夏目漱石、松山中学に赴任する。
- 1897(M30) 歎三、キリスト教主義教育に憧れて、関西学院普通学部第3学年に編入する。その後、同志社、早稲田大に学び、1910～1914 カリフォルニア大学に留学する。

- 1911(M44) 夏目漱石、文部省からの博士号授与を辞退し、世間の耳目を集める。
- 1914(T 3) 歎三、卒業に際し博士論文を提出して帰国したが、尊敬する漱石先生の博士号辞退を知り、再度渡米して論文を取り下げる。
- 1939(S14) 歎三、五十九歳のとき、長男・道也誕生。

こうなると、私が抱いた漱石・歎三・道也の時間的疑義は完全に晴らされたことになる。

ここに登場する畑家の人たちは、いずれも一角の人物であり、硬骨直情の人のようである。無念の死を遂げた祖父は陽明学者であったといい、その妻(道也の祖母)の潔さは見事である。彼女が導かれた聖書の一節は、「愛する者よ、自ら復讐すな、ただ神の怒りに任せまつれ」であったという。今日の聖和と関学との関係を想うとき、なにか一入の感がある。

漱石にならって博士号を取ろうとしなかった歎三を、「アホやと叱った」おふくろさんが、歎三の母であったのか、道也の母であったのかは、残念ながら聞きそびれた。いつの時代においても女性は賢く現実的であり、男は愚かなる夢想家なのである。

私が知る畑道也はたかだか大学での四年間のみだが、そのときからやはり彼は傑物であった。

オケの秀でたチェロ奏者であるというより、指揮者としてより多くの才能を発揮した。三年時には難曲「ブラームス交響曲第一番」を、四年時には世間の誰もが夢想だにしなかった、ベートーヴェンの「第九交響曲」を、学生オケでの全国初演をやったのけたのである(神戸高校合唱部共演)。彼は、Beethoven をドイツ語で「研究」していた。図書館から借り出してきたであろう分厚い原書を、昔の青焼き複写機で長い時間をかけてコピーするのを、私も手伝ったことがある。彼の刻苦勉励の血は、やはり畑家先祖伝来のものであろう。おかげで私たち同期は、その栄光に浴することが出来たのである。

熊本で再会した時、アルコールの入った足取りで街路を歩きながら彼はふといった。「きみのコントラバスの音、憶えてるで」と。四十年を経ての友情であったろうか。【右は大学4年時の筆者】



畑歎三が語る自伝を口述筆記したものの。編者平賀耕吉。1951年8月6日。題字「あゆみ」は畑歎三による。



学位に関し、畑歎三はこう語っている。「私は最初は学位を取るつもりでしたが、私の私淑していたポーブ教授は学位をもつておらず、それから漱石の事、又その弟子の真鍋嘉一郎先輩のことなどを思い、私も学位を取らずに自由に研究をしようと決心しました」(『あゆみ』16頁)。

### Conductor 畑 道也

…彼が、指揮台に立ったのは大学二年生の時。

幼少からの音楽に対する欲は、ここに指揮者という「偉大な芸術家」の座を可能にしたのである。彼の指揮は健康的で、そして若さに溢れた純粹な息吹を感じさせられる。団員は彼のもとで、彼の欲する音楽になるだけ闘うように努力しているが、彼の要求は果てしない。彼は冗談をよく言う。いざ Beethoven を始めようとする時に、「今朝のサザエさん読んだか？今日のケツサクやで…」。団員は Beethoven とサザエさんとの関連付けに、指揮棒が動きだしてもしばらく頭をひねっていなければならない。すると、しばらくして、「こら！そんなにしとんや、吹かんかい！」と弾丸の様な声がかとぶ。譜面台を打ついきおいで、指揮棒は先が折れて無残な姿となる。私達団員は、そんな畑氏に大きな期待をかけている。(N.F)



関西学院交響楽団第22回定期演奏会(1962.6.1)パンフレットより

